

2011年度 精神科診療所 こひつじ診療所 事業計画

ひき続き、小回りのきく精神科、心療内科中心の診療所として、地域に密着しつつ、特色のある福祉医療活動を実践、展開していく。

1. 児童精神科、発達障がい者にも対応できる精神科、心療内科として診療活動を続けていく。

看護師（常勤1名 非常勤1名）、精神保健福祉士（2名）、臨床心理士（非常勤3名）、元教師（非常勤1名）たちと共に、午前8時前より診察を開始し18時前後まで、30分ほどの昼休みを除いて、ほぼ絶えることなく診察に明け暮れている。水曜、金曜日には1日50～70名来院するが、初診診察には60分程度を確保している。発達障がいを含む2～3歳児も含め、子どもの受診が多い（2009年1～12月：6歳未満 20.2% 7～12歳 21.2% 13～15歳 17.8% 16～19歳 8.9%：20歳未満 計 68.1%）。成人の受診も増加している。「まきばの家」、「こどもの家」以外でも、母親などから愛情を受けることが困難であったり、虐待を受けてきた子どもたちの診療の要請が増えている。今年度も、初診時になるべく丁寧にみて、必要なケースはフォローし、成長を見守っていくように心がけたい。

医師1名だけでは限界があり、看護師、精神保健福祉士、臨床心理士、元教師の連携をひき続き大切にしていこう。背後から「まきばの家」のスタッフたちとの協力が得られていること、さらに、豊かな自然環境、動物たち（現在、待合室、診察室の前に6頭の羊が放牧されている）が備えられていることに感謝している。2010年5月より、診療所内のデイケア空間を「居場所」として生かし、特別支援学校などで30年勤め、早期退職された元教師に週1日、小学生の遊びを中心としたグループ活動や、小中学生の個別面談や学習指導をして頂き、個々の子どもたちに、より細かく関わるのが可能となった。2011年5月から、この方に週2日従事して頂き、他のスタッフとも協力し、デイケア空間での子どもたちの活動のあり方を模索していく。

更に、通院中で「ひきこもり状態」などにある多くの青年たちを覚え、「デンマーク牧場」の営みそのものに青年たちが何らかの形で参加できる方向を、「こどもの家」のスタッフたちと相談し、全面的に協力を頂きながら、模索していきたい。

2. 先のことを見通しながら、「ディアコニア」「まきばの家」「こどもの家」により連携するためのあり方について模索していく。

「こどもの家」「まきばの家」の児童、青年を診察し、フォローしているケースが増えている。ひき続き、「ディアコニア」の入所者も必要な方の診察を行い、また各施設スタッフの相談に応じていく。今年度も「まきばの家」の症例検討会（児童相談所の職員なども参加）に、診療所スタッフも可能な限り参加していく。「まきばの家」以外の児童養護施設、自立援助ホーム、乳児院の職員などとの交流も、「まきばの家」の職員と共に深めていく。具体的に浜松市にある児童自立支援施設の子どもたちの診療を往診も含めて続けていく。

3. ひき続き比較的小規模な地域（袋井市とその周辺地域）において、福祉・教育・医療連携の可能性を、特に養護が必要な発達障がいなどの子どもたちを中心に据えながら模索していく。

院長は、袋井市と掛川市の特別支援教育支援チームの委員長を今年度も務めていく予定。また、静岡県西部の就学指導委員会と袋井市の就学指導委員会の委員も継続していく。

袋井市で、必要な子どもを広い意味で「要養護児童」として見守り、保健センター、教育委員

会、しあわせ推進課が、横断的包括的に連携するために、2008年4月より、各機関が合同して、幼児や小学生の事例検討会を年6回開催したが、今年も委員として参加していく。

2007年10月に委員長として提言した、袋井市の早期療育施設の開設について、袋井市がその一歩として並行通園施設「はぐくみ」を2010年5月より開設したが、まだ定期通園を含めた早期療育システムの構築が十分に図られていない。そのために必要な協力を続けていく予定である。

2010年4月より、袋井特別支援学校磐田分校の精神科医師として校医を勤めているが、引き続き、袋井特別支援学校の本校、東遠分教室、御前崎分校に在籍する子どもたちのためにも教師からの相談に応じていく。

以上